

世界的競争構造下におけるバングラデシュ酪農の持続的條件と支援システム
ーバングラデシュの主要な酪農地帯を事例にー

モハマド モンジュール ホック

バングラデシュの酪農部門は、長い歴史を有し、国民の暮らしにおいて、雇用と所得、栄養と食事、エネルギーを創出する重要な役割を果たしてきた。酪農部門の国民経済における重要性を考慮して、政府は1947年に創設された酪農協を再編し、1973年に酪農協ミルクビタを開設した。その後、酪農協ミルクビタは酪農家に対し多様な無料奉仕事業を行い発展計画を遂行してきた。その結果、ミルクビタの組合員数は増加し、酪農家の生産性、原料乳生産量、乳牛飼養頭数の向上をもたらした。その中で、国民一人当たり年間ミルク消費量もまた増加した。

しかし、1995年、政府は乳製品に関する貿易自由化政策を採り、同時に酪農家に対する助成金削減を行った。特に、2008年後半、政府は輸入粉ミルクの関税率を75%から36%へ切り下げた。この関税政策の転換は安価な粉ミルク輸入の激増をもたらした。これはメラミンの影響を被る子供達にとって危険性が高まるばかりでなく、国内の酪農製品サプライチェーン関連業者にとって経済的脅威ともなった。特に、酪農家やミルクビタは、乳製品市場環境の複雑で急速な変化に直面することになった。酪農家は、貿易自由化によって変化した市場条件に順応することは難しく、世界的な隔絶した競争力に直面することになった。そこで、本研究は、バングラデシュの酪農部門の持続的條件とサポートシステム構築のための緊急課題を検討した。

第1に、輸入粉ミルクが国内産原料乳の市場構造の変容と私的加工業者が採る市場行動の変化に及ぼす影響を分析し、次の諸点を明らかにした。1) 乳製品の加工・小売を行うスイートショップは、国内原料乳の最大の使用者として国内酪農家と強い関係性を有してきたが、その加工原料乳を国内原料乳から輸入粉ミルクへ変換していること、2) ミルクビタを除く主な乳製品加工業者は酪農家から原料乳の集乳を減らしていること、3) 私的加工業者はSNFテスト基準を2.5から4へ上げ、また酪農家からの集乳日数を減らし、1日の集乳回数も減らしたこと、4) 以上の状況の中で、ミルクビタは酪農家から全ての原料乳を集乳できなかつたが、組合員や他の酪農家から貯蔵力限界まで購入したこと、5) 酪農家は原料乳を経営費以下で販売したこと、その酪農家に乳牛を肉用として販売させ廃業に追込む状況を作ったこと等である。

第2に、貿易自由市場下における小規模な酪農家の持続的條件を査定し、次の諸点を明らかにした。1) 実態調査を行った酪農家の62%が小規模農家であるが、彼らの94%が複合経営方式を採って農業経営を持続していること、2) 彼等の44%が原料乳を適正価格で販売する為に都市消費者や病院と契約を結び原料乳を販売していること、3) 彼らのほとんどが地方市場において産地仲買人に代わる酪農協の機能を必要としていること等である。

第3に、私的加工業者の競争戦略が酪農協ミルクビタに及ぼす影響を分析し、次の諸点を明らかにした。1) 私的加工業者の市場シェアが拡大するに伴いミルクビタの純所得が減少したこと、2) 私的加工業者が原料乳集乳における戦略を巧妙にして組合員酪農家とミルクビタ間のミスマッチを創出した。3) 組合員の少数が乳製品加工技術を有し、原料乳をミルクビタへ最小限量だけ販売し、自家乳製品加工原料に回していること等である。

最後に、世界的競争構造下におけるバングラデシュ酪農の持続的條件を考察した。酪農経営の持続性は自由市場下では極めて低いが、本研究は世界的競争下での酪農部門の発展の為に支援システムについて考察した。そして、1) ミルクビタは、酪農家に対し無料奉仕の目的を説明すること、簡易な借金返却システムを設置すること、組合員が原料乳を出荷し易くすること、加工技術を有する組合員との共同事業を企画すること、その事業機能を拡張すべきであること、2) 政府は輸入粉ミルクの品質を厳格にチェックし、輸入量を制限し、輸入粉ミルクの関税を高めること、そして補助金給付による助成で酪農家保護を検討すべきであること、3) 酪農家は複合経営、都市消費者との契約取引、産地仲買業に代替する協同組合システムを検討すべきであることなどを明示した。